

『精神と物質—分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』

立花隆、利根川進著／文春文庫

生きていれば悩みはつきもの。学生のみなさんも、勉強、研究や進路で悩むことがあるでしょう。いつうまくいくとも分からない実験に嫌気がさし、やる気をなくすことも多々あるでしょう。かくいう私もそうでした。いや、今でもそうですが…。そういったときにお勧めするのが、“研究者の人生や半生がつづられた本を読む”ことです。私は読んだあとに、“やる気”と“根拠のない自信”がみなぎってきます。悩みが解決するヒントもあったりします。そのような本のひとつとして、今回紹介するのが『精神と物質』です。この本は1987年のノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進さんとジャーナリストの立花隆さんとの対談をまとめた本です。本書の題から、脳か哲学についての本かなと思われるかもしれませんが、彼のノーベル賞受賞にいたるまでの研究生活（ウイルスや免疫についての研究）や彼のサイエンスや研究者についての思いが熱く語られている本です。

利根川さんは“免疫”という動物がもつ生体防御システムで重要な働きをしている“抗体”というタンパク質ができる仕組みを明らかにしたことでノーベル賞を受賞しました。よって、本書には生物学（特に分子生物学）の専門用語がたくさん出てきますが、分かりやすく説明されているので、知識があまりない学生さんでも内容を理解することができると思います。それよりも、彼の研究に対する考え方が非常にためになるので、ぜひとも読んでほしい本です。これから生物について研究をしようと考えている学生さんには、役立つ内容が盛りだくさんあるので必ず読んで下さい。簡単に利根川さんの研究半生をみてみましょう。一浪して京都大学理学部化学科に入学。本当は工学部の化学系学科に行きたかったのですが、人気が高く落ちる恐れがあったため理学部を受けたそうです。このとき、生物が細胞からできていることを知らなかったらしい。大学卒業後、アメリカの大学院と研究所をへて、ノーベル賞受賞研究の舞台となるスイスのパーゼル免疫学研究所へと移ります。日本を出てから8年目31歳の時です。本書には研究を行ううえで役にたつ彼の言葉がたくさんあります。「何をやるかより、何をやらないかが大切だ」「何で実験が失敗したのだろうか」と、考えて考え抜く。観察と考察にける集中力これが大事」「実験なんてたいがいうまくいきません。失敗の連続。だから楽天性じゃないとだめ。楽天性と精神的強靱さが必要」。学生さんに心に留めておい

て欲しい言葉です。

現在、彼はマサチューセッツ工科大学で脳について研究しています。人間の精神現象を物質レベルで解明することに取り組んでいるそうです。最後に、励みになる彼の言葉を－「自分はわりとものをしらない人間なんです。記憶力も悪いし、そんなに頭のいい人間じゃない」「記憶力があまりよくないから、頭のどこかにポカッと穴が開いている。だからときどき変なことを考える。それがサイエンティストには重要」。どうです、少しは“やる気”と“根拠のない自信”が出てきませんか？

執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『精神と物質 分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』 立花隆、利根川進著
文春文庫 1993年 540円

[ブックガイド目次へ](#)